

第 66 回国際理解・国際協力・多文化共生のための全国中学生作文コンテスト東京都大会 銀賞

創価中学校 1 年

太田 愛美

課題 ③

平和と安全、貧困、気候変動など世界中で様々な課題がある中、国際社会が優先して取り組むべき課題は何か。

副題

二十分の道のりから考える地球の未来

本文

二十分の道のりから考える地球の未来

駅から家までのわずか二十分の道のりが、これほどまでに辛く、恐ろしいものを感じたことはなかった。今年の夏、私は日傘を差して自分なりに暑さ対策をして歩いていた。しかし、家に帰り着いた直後、体に急激なだるさが襲ってきた。帰る途中に水分補給を忘れてしまったこともあってか、頭がガンガン痛くなってクラクラし、何もする気が起きなくなってしまった。軽い熱中症だった。涼しい部屋で横になりながら、私は「このまま毎日暑くなったら、未来の夏はどうなってしまうのだろう」と強い恐怖を感じた。

思い返せば、小学一年の頃は夏の太陽の下でも友達と公園の砂場や遊具で一時間くらいは平気で遊び続けることができていた。もちろん当時も暑い夏ではあったはずだが、ここ最近の暑さは、あの頃の記憶とは明らかに違う。命の危機を感じるようなおかしい暑さが毎年のように続いている。この体験を通じて、私はニュースの中の遠い出来事だと思っていた「地球環境の危機」が、すぐそばまで迫ってきているのだと肌で実感した。

環境の異常を感じる瞬間は、暑さだけではない。この前花火大会に行った時、川に大量のゴミが捨ててあるのを見た。テレビや学校では「環境を守ろう」と毎日のように言っているのに、現実目の前で起きていることは全然違って、私はなんとも言えない情けない気持ちになった。言っていることとやっていることの矛盾を感じて、胸が痛くなったし、悲しい気持ちになった。また、最近ニュースでよく見るクマが街に出てきて人間に被害を与える事も、元を正せば人間がクマの住む森林を奪ってしまったことがきっかけなのだと思う。

暑さも、川のゴミも、クマの被害も、すべてバラバラの問題なのではない。結局は、人間が自分たちの都合ばかりを優先して、自然を壊し、地球を大切にしていなかったから、今そのツケが回ってきているのだ。これまで地球を傷つけてきたのは私たち人間であり、その責任を一人一人が自覚しなければならないと強く思う。

しかし、それを今さら責めても過去のことは変えられないし、壊れた自然が勝手に元に戻るわけで

もない。だからこそ国連ではSDGsという目標を立てて、世界中で協力して取り組もうとしているのだ。国際社会が今、最優先で考えるべきなのは「過去を悔やむこと」ではなく「これからどうするか」ということだ。

今、ニュースでは毎日のように、節電やエコバッグの利用といった取り組みが告げられている。しかし、実際はSDGsの目標は一つも達成できていない。どんなに言葉で「やろう」と言われていても実際に行動できている人はまだ少ない気がする。人間がやってきた過去なら今すぐに変えられるはずなのに、それができていないのが今の世界の大きな問題だと思う。

日傘を差していても倒れそうになったあの二十分間の道のりは、私に「もう行動を変えなければならぬ」という強い警告をくれた。

これからの未来を生き、次の時代を作っていくのは私たち中学生だ。言葉では「環境を守ろう」と分かっていても、社会全体で実際に行動を起こすことは決して簡単ではない。だからこそ、私たち若い世代から少しずつでも意識を変えていく必要がある。私はあの日以来、部屋の電気をこまめに消すことや、エアコンの温度を省エネモードの二十八度にするよう心がけるなど、自分にできる小さなことを始めている。まずは私自身が「実際に行動する一人」になり、この危機感を家族や友人とも話し合っていきたい。小さな積み重ねこそが私たちの未来の地球を守ることにつながることを信じて。